

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370321

研究課題名(和文)9・11以降の英国アジア系文学と映画

研究課題名(英文)Post-9/11 Representations of British Asian Identities through Literary Works and Films

研究代表者

田口 哲也 (Taguchi, Tetsuya)

同志社大学・文化情報学部・教授

研究者番号：00145103

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：英国におけるインド亜大陸からの移民はアジア系英国人と称される。本研究は、大英帝国に起因する複雑な多文化社会を形成している英国の人種的少数派の中から、このアジア系を抽出し、彼・彼女らの英国への同化の経験を文学作品と映像作品の分析を通して解明することを主目的とした。英国社会への一方的な同化・統合をアングロサクソン化と呼ぶが、もともとこのような同化を拒むアジア系が9・11以後の厳しい環境の中で、どのようにして自己のアイデンティティーを確立していったかを、現地調査を含めて、実証した。

研究成果の概要(英文)：In UK immigrants from the Indian sub-continent are called Asians. UK has inherited from the former British Empire a variety of ethnic minorities. Our research focused on the experiences of these Asian immigrants and we analyzed how they are trying to assimilate themselves to the UK multicultural society through literary works and films related to this issue. Asians were not easily anglicized in the past and showed in our research how they are trying to establish their own identity under the difficult situation, particularly after 9/11.

研究分野：人文学

キーワード：アジア系英国人 9・11 人種関係 ポストコロニアリズム グローバル化 現代英文学 英国映画

1. 研究開始当初の背景

現代世界は二つの世界大戦を経て帝国主義の時代から国民国家の時代へと移行した。この戦後秩序の核となったのは冷戦構造であるが、同時にアジア・アフリカの政治的独立というポスト・コロニアルな状況が進行していた。このような時代の波を受けて、大戦後の英国は不可避的に多文化社会へと大きく舵を切ることになった。かつての植民地で、本国と同様のアングロサクソンの統治を行っていた北アメリカ大陸の2つの国、即ちアメリカ合衆国とカナダがそうであったように英国も1960年代からは本格的な多文化社会を経験した。ところが9・11の同時多発テロはこの多文化社会の根底にある移民社会に厳しくそのアイデンティティーを問い直す契機となった。とりわけ英国における最大の少数派であるインド亜大陸からの移民はアジア系と呼ばれ、英国への無条件な同化を拒否していただけに、彼・彼女たちの自己意識に大きな変化が生じた。

本研究は、単一文化から多文化社会へと変化を遂げた英国社会において、アジア系移民がどのようなアイデンティティー上の問題を抱えているのかをアジア系の文学作品や映像作品の分析を通して探り出し、その固有の問題がどのような状況で、またどのような動因によって生み出されているかを解明することを目標としているが、これは単なる英国研究にとどまらず、いずれは何らかの形で到来が予想されている日本における多文化社会を検討する上でなんらかの知見を提供することになると確信している。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上記の「研究開始当初の背景」で暗示したように、2001年にアメリカで起こった同時多発テロ、いわゆる「9・11」以後の英国の人種関係の変化が英国の文学作品や映像作品にどのように反映されているかを分析することによって21世紀のグローバル社会が不可避的に遭遇する諸課題を予測することにある。

英国は周知のように北アイルランド紛争を経験し、異なった文化集団との共生の困難さを熟知していると考えられていたが、9・11に加えて2005年にロンドンで発生した同時多発テロ、いわゆる7・7事件を契機として、これまでの多文化社会を支えてきた意識に大きな変更を加えなくてはならない状況に追い込まれた。

本研究はしたがって第二次大戦後の英国が築き上げてきた多文化社会を理解したうえで、上記の喫緊の課題に応えなくてはならない最大の人種的少数派であるアジア系英国人の意識に起こった変化をかたちの文学作品や映像作品から抽出するとともに、これらの言語や映像がどのように発信され、社会

構造そのものにどのような影響を与えたかも推論することが可能なはずである。

3. 研究の方法

アジア系英国人作家の文学作品とアジア系英国人映画監督による映像作品に加えて、非アジア系ではあるが、アジア系の移民問題を取り上げている作品も分析の対象とした。というのも、多文化社会では単一文化社会とは異なり、ひとつのテーマが複数の視点で語られなければならない、単にアジア系の作家による作品分析だけでは多文化社会の理解は不十分だからである。

9・11以後のアジア系文学の作品分析の前段階として、そもそもそれまでのポスト・コロニアル文学がどのようなテーマを取り扱ってきたかをあらかじめ吟味する必要がある。20世紀後半の英国のポスト・コロニアル文学の旗手たち、即ち、ハニフ・クレイシ、サルマン・ラシディー、ティモシー・モー、カズオ・イシグロなどの主要な作品をカテゴリー分類する。そのようにして得られたこの作家たちの特徴を、タイポロジーの手法を用いて9・11行以後のアジア系作家との対比を行う。

この結果からどのような環境設定と条件のもとで典型的な移民の意識が形成されるのか、また、それはどのような動因によって変質していくのかを普遍的な法則として理論化した。

4. 研究成果

研究は人種関係論を中心とした第1段階(概ね平成25年度)、アジア系文学・映画の具体的な作品分析を行った第2段階(概ね平成26年度)を経て、理論構築を行った第3段階(概ね平成27年)に分けることができる。以下、各段階での成果を報告する。

(1) 第1段階では次の2点の研究を行った。

人種関係に根本的な変化が生じる契機とそのメカニズムの解明

英国における人種関係の変化の流れを具体的な文化現象を用いて解明

に関しては分担研究者のロバート・クロスが中心になって研究会を構成し、田口がその理論構築を担った。今回注目したのは地政学的な影響もさることながら、テクノロジーの発達によって文化や経済の情報がグローバルに共有されるようになったという情報環境の変化である。一例をあげるとアラビア語による衛生放送アルジャジーラの誕生によってアラビア語圏の情報は拡散すると同時にバリアーも生み出した。ガザでの紛争報道やその後のアラブの春など、この情報環境の変化による影響はメディア学では以前から

指摘されているが、それが具体的に表現としてどのように現れるのかを詳細に検討した。結論としては、1地域の情報がグローバルに共有される結果、絶えず文化的な緊張関係が生まれるというものであった。そこで、第一次世界大戦後、第二次世界大戦後の人種関係の変化を項目ごとに立ててカテゴリー分類を行い、その後、9・11後のアジア系文学を同様手法によって分析し、両者の結果をタイポロジーの手法を用いて対照させた。突出して注目すべき点は移民の量的変化とメディアの普及率、またその伝達速度である。この研究成果の一部を田口が日本T・S・エリオット教会にて発表した。

に関しては分担研究者であるロバート・クロスが現地調査を行い、その後、研究代表者の田口と共同で理論構築を行った。私たちが注目したのは Sandhya Suri による “I for India” である。この作品は英国における2世代のインド系移民の意識の変化をドキュメンタリー映画の手法を用いて展開したものであり、映像的な記録の持つ特性を最大限にまで応用している。私たちはスチュアート・ホルの「プロダクション理論」を用いてこの作品を分析し、移民意識の特性を抽出した。この研究成果はクロスが2014年にチリで開催された Alexander von Humboldt Conference で発表した。

(2) 第二段階では次の2点に絞って研究を深化させた。

アジア系英国人のアイデンティティーの形成過程の解明

9・11後のアジア系英国人のアイデンティティーの変容に関する調査研究

インド亜大陸からの移民とその子孫がどのようにしてアイデンティティーを形成するかに関して、私たちは映画やラジオによるドキュメンタリーにおける描写から項目を抽出し、移民、同化の過程をモデル化した。具体的には Sandhya Suri のドキュメンタリー映画である “I for India” をモデルにして Kavita Puri のBBCラジオドキュメンタリー・シリーズである “Three Pounds in My Pocket” を事例として取り上げ、白人の英国人とアジア系英国人との関係进行分析・記述し、人種関係のモデルを普遍化させた。この研究成果は研究分担者のクロスがデンマークでの学会で報告し、また田口は論文「ポスト・白人文化の創作原理(1)」で公表している。

に関しては、主にアジア系英国人で構成される劇団、特にロンドンを拠点に活動している Tara Arts や Tamasha Theatre Company、Kali Theatre Company、そしてアジア系英国人の劇作 Shahid Nadeem (“Dara” 2010) や

Anwar Akhtar (“the Samosa,” 2012) が手掛ける演劇をクロスが現地調査でデータを収集し、持ち帰ったデータを田口が分析し、アジア系英国人のアイデンティティーの変容をポスト・コロニアリズム理論一般に位置づけた。この研究成果の一部は田口による単著『ケネス・レクスロスの現代対抗文化』(国文社)の中で公表された。

(3) 第3段階では25年度、26年度の研究成果を踏まえて、これまでの研究成果を講演や出版のかたちで発表した。以下、その報告である。

研究代表者の田口は、日本エズラ・パウンド協会の全国大会の特別講演に招聘され、第一次世界大戦と第二次世界大戦の間の期間、いわゆる大戦間に欧米で広がりを見せたコスモポリタン意識、第二次世界大戦後の政治的ポスト・コロニアリズム、9・11以後の多文化社会のあり方について、それぞれを英米文学の潮流に関連させて講演を行った。

分担研究者のクロスは過去2年間の調査結果を研究代表者の田口と吟味し、理論構築を行った上で、2つの国際学会で研究成果を発表した。イスタンブールで開催された国際学会では Sandhya Suri の “I for India” を中心に取り上げ、移民社会における第1世代と第2世代のアイデンティティーが異なることになる原因を特定した。またインドのニューデリーでの国際学会では英国のアジア系文学や映画に見られる2世代間のアイデンティティーをめぐる対立を止揚する方法としてオーラル・ヒストリーの有効性を訴えた。2世代間では識字力や同世代との共生経験が根本的に異なっているために誤解や対立が生じる。移民社会での世代間のアイデンティティーをめぐる対立を緩和し、ホスト国の移民社会への融合をどのように推進できるかは、ホスト国の教育政策や文化政策による対応の仕方大きく変わってくることを指摘した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

田口哲也、「ポスト白人文化の創作原理(2) ケネス・レクスロスの宋文化論」、『文化情報学』 査読有、第11巻2号、2016,94-102.

田口哲也、「ポスト白人文化の創作原理(1) ケネス・レクスロスの人と生涯」、『文化情報学』 査読有、第10巻1号・2号合併号、2015,1-9.

Robert Cross, Sandhya Suri's “I for India,” IAFOR Journal of Media,

Communication and Film, 査読有 1, 2014, page numbers unknown.

〔学会発表〕(計 6 件)

Robert Cross, Oral History in the Recovery and Representation of the Life Experiences of First-Generation British Asian Migrants, International Conference on Migration, Diaspora, and Development, 2016 年 2 月 20 日, Indian International Center, New Delhi, India.

田口哲也, 「ケネス・レクスロス・アゲイン」, 日本エズラ・パウンド協会、2015 年 10 月 31 日、大阪府吹田市、関西大学

Robert Cross, Migrant Voice and Agency in Sandhya Suri 's I for India, International Film Studies and Cinematic Arts Conference on Cinema and Identity, 2015 年 6 月 10 日、Nazim-Hikmet Cultural Center, Istanbul, Turkey.

Robert Cross, Shifting Recollections of the Transnational: British Asian Narratives, Comparative Studies in Migration and Memory Symposium, 2014 年 11 月 6 日、University of Copenhagen.

Robert Cross, Sandhya Suri 's I for India: Rediscovering the Migrant 's Voice, VII Alexander von Humboldt, Cladio Gay & Ignacio Domeyko Conference, 2014 年 1 月 5 日、University of Chile & Pontificia Universidad Catolica.

田口哲也, 「ポスト・モダン時代における T. S. エリオットへの接近法 解釈学をヒントにして」, 日本 T. S. エリオット協会、2013 年 11 月 10 日、大阪府吹田市、大阪学院大学

〔図書〕(計 1 件)

田口哲也, 国文社、『ケネス・レクスロス中心の現代対抗文化』、2015 年、222 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田口 哲也 (TAGUCHI, Tetsuya)
同志社大学・文化情報学部・教授
研究者番号：00145103

(2) 研究分担者

ロバート クロス (CROSS, Robert)
同志社大学・グローバル地域文化学部・教授
研究者番号：70278464